

I 大学間連携の共同学位プログラム

筆者が専門とする植物生態学や植生学の分野では、研究者個人が長年利用してきた調査地を、他の研究者との連携により、ネットワーク化することが多くなってきました。1人の研究者が行える野外調査には限りがありますが、それぞれの国や地域において、同様な手法で調査をしてきた研究者が連携すれば、1地点の結果が多地点での結果を生み出し、その中で共通な現象と地域性を見出すことができます。1人の研究者が1地点で詳しく調査を行っていたとしても、地域の特徴は見えてきません。

日本の本州中部の山岳地に目を向けると、日本海側に面した飛騨山脈の北部から太平洋側に面した赤石山脈の南部まで、気候や地史の異なる山々が連なっており、山毎に特徴があります。生物相にも共通性と地域性があり、雪崩・火山噴火・斜面崩壊・河川氾濫等の災害についても地域性があります。このような自然を対象に教育研究を行っていく上では、一つの地域に留まらずに、地域全体を見つめる目を持ち合わせる事が重要ではないでしょうか。



写真1. 1分スピーチにより研究を紹介する発表者。信州大学農学部にて（写真：山本雅資提供）

本州中部に所在する大学及び教育研究施設が連携して、教育研究を実践しようとする試みが始まっています。筑波大学、信州大学、岐阜大学、山梨大学、静岡大学、そして富山大学の6大学が連携し、それぞれの大学の教員の専門性（強み）と野外教育研究施設の特徴（地域性）を活用して、共通の教育プログラムを構築し、修士の学位を与えようとする試みです。学生は、多様な自然から共通性と地域性を体感します。同時に、他大学の教員や学生とも新しいネットワークができ、修士研究、就活、進学にも大きな良い影響を与えるのではないかと思います。年末に信州大学農学部

で開催された3大学合同の研究報告会に参加してきましたが、参加した学生は他大学の学生の発表にも大きな刺激を受けているようでした。大学連携により、程よい競争意識が生まれ、さらに新しいネットワークにより新たな情報も得られます。大学間の競争が叫ばれている今日ではありますが、連携することで個性を打ち出すこともできるのでないでしょうか。連携の輪の中に入り、富山大学の教育研究の特徴をさらに出していければ良いと思っています。（文責：和田直也）

II ASSW2015 開催

2015年4月23日から30日の8日間、ここ富山で北極科学サミット週間 2015 (ASSW2015: Arctic Science Summit Week 2015) が開催されます。このASSWとは、北極研究を支援及び促進する国際組織が開催する会議の集合体です。北極科学のすべての分野における調整・協同・協力のための機会が提供され、科学的成果について集中的に議論を行うことを目的としています。1999年から毎年、世界各国で開催されてきており、2015年に17回目のASSWが日本で初めて富山（富山国際会議場）で開催されることになりました。

ASSW2015の前半では、国際北極科学委員会関連会合、続いて市民向け公開講演会が予定されています。後半には、2年に一度開催されていて北極研究の成果を議論するためのシンポジウムである第4回国際北極研究シンポジウム(ISAR-4: Fourth International Symposium on the Arctic Research)、並びに北極科学研究の10年計画を策定するための10年に一度の会議である第3回国際北極科学計画会議(ICARP III: Third International Conference on Arctic Research Planning)が予定されています。なお、ASSW2015にはWebサイトが開設されており、日本語は「<http://www.assw2015.org/japanese/index.html>」からたどることができます。

（文責：杉浦幸之助、ASSW2015 ISAR-4/ICARP III-Remote Sensing of the Arctic System-セッションコーディネーター）

III 現地調査って楽しい！

昨年末にイルクーツクを訪れた。とにかく寒かった。出発前に多忙だったので、現地で揃えればいいのかと気軽な準備で飛び立ったのがまずかった。極寒のシベリア。柔なビジネスシューズの中の指先が凍える。

中国人市場を調査する。現場で現地の研究仲間と視点を共有しながら観察していると、いろんな着想が新たに湧いてくるものだ。こんな研究もできそうだね、それじゃ、こういうのはどうだい。じゃ、ちょっとパイロット調査的に確かめに行こうって、次の調査スポットに向かう。現地での現地研究者との即興豊かな調査は、楽しい。

夢中になって歩き回っているうちに、研究仲間のコースチャに止められた。

「大丈夫か？歩き方変だよ。あ～、だめだよ、そんな靴じゃ！靴買いに行こう！」

私はせっかくだから中国人市場で靴を買いたいと言い張ったのだけれども、コースチャも彼の奥さんも「品質悪いからやめときなさい」と言い、しぶしぶ彼らの行きつけのモールについて行った。靴屋で試し履きしながら、中国人市場の商品の品質について話し込む。

「中国人市場の靴は安いけど品質が悪いね。でも、ヨーロッパからの靴は高いから、手が出ない人もいる。ただ、キルギス人の売っているものは、同じ中国製でもまだましなんだ。」

イルクーツクへ流れてくる中国製品は、中露国境から流れてくる北回りキルギスと中国との国境を通じて流れてくる南周りがあるようだ。まだ、実態は調査中だ。売り手もそれはわかまえている。中国人市場の女性下着屋では、「キルギス女性の売り子募集」なんて求人が貼られていた。中国人が売るよりも、キルギス人が売るほうが、なんとなく品質がよくみえるようだ。ふと見渡すと、中国人市場なのにキルギスの表象がいっぱいだった。

現地で見えてくるものは多い。そして、現地で即興的に生まれる着想もある。そして、いっぱい働いた後に研究仲間と飲む酒もまた格別だ。だから、現地調査はやめられない。



写真2: 「キルギス女性の売り子募集」
イルクーツクの中国人市場にて

この調査の成果は、日本国際問題研究所ホームページにて公開される予定です。(文責:堀江典生)

IV 法・経済・理学の連携による国際貢献

それは2014年の10月中旬のことでした。同僚から理学部の張勁先生が話をしたいと言っているの、今度時間をとってほしいと言われました。張先生のことは高度差4000mプロジェクトを通じて知っていましたが、環境問題の中でも私とは違った分野の専門家でしたので、話が見えない中、研究室を訪問しました。話を聞いてみると、台湾のある企業から日本の環境問題克服のノウハウを技術的側面だけでなく、社会経済的観点も含めた形で講演を行ってほしいと依頼を受けているので、環境経済学の専門家として話をしてほしいとのことでした。

実はこの依頼は元々経済学部部の岩本学先生のところに来たものでした。岩本先生は必ずしも環境問題を専門としていませんが、大学院時代の友人の台湾人から相談を受けたため、たまたま別件で同席した際に張先生に相談したところから始まったのです。

張先生のリーダーシップと岩本先生の卓越した仕切りのおかげで、丸茂克美先生(理学部:環境地球化学)、神山智美先生(経済学部:環境法)を加えた6人のチームが結成されました。

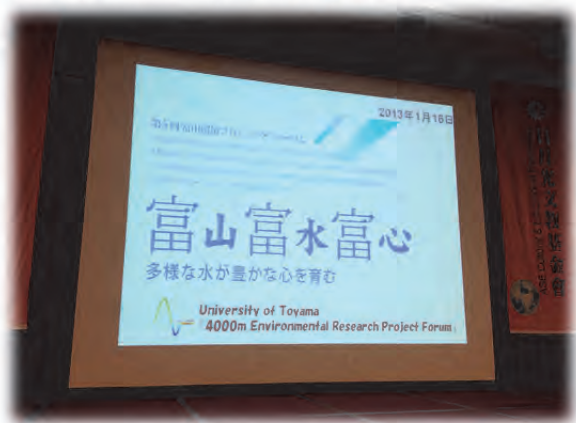


写真3: 報告の様子

時機を逸してはいけないということで、報告会は12月初旬に台湾の高雄市で開催され、企業関係者を中心に約200名が集まりました。報告者はそれぞれの専門分野をわかりやすく解説することに努めましたので、普段は環境問題と関わりのない来場者の方にも日本の環境問題への理解を深めてもらえたと思っています。実際、報告後にはフロアから活発な質問がありました。

個人的には、事前の打ち合わせ、それに高雄への移動・滞在中に専門の異なる学内の他の先生方と多くの議論をすることができたことが大変有意義でした。張先生のリーダーシップもあり、帰国後既に2回の反省会を開催しておりますが、これからまだまだ伸びしろのあるチームであると思っています。(文責:山本雅資)